

主 題：献 金

聖書箇所：コリント人への手紙第一 16章1-4節

今朝、私たちはIコリント16：1-4を通して主のみこころを学んでまいりましょう。

Iコリント16：1-4

- :1 さて、聖徒たちのための献金については、ガラテヤの諸教会に命じたように、あなたがたにもこう命じます。
- :2 私がそちらに行ってから献金を集めるようなことがないように、あなたがたはおのこの、いつも週の初めの日に、収入に応じて、手もとにそれをたくわえておきなさい。
- :3 私がそちらに行ったとき、あなたがたの承認を得た人々に手紙を持たせて派遣し、あなたがたの献金をエルサレムに届けさせましょう。
- :4 しかし、もし私も行くほうがよければ、彼らは、私といっしょに行くことになるでしょう。

A. 献金 1-4節

1節の初めに、「聖徒たちのための献金については」とあるのは、実はこれはコリント教会からパウロに対する質問の一つだったからです。コリントでの働きを終えたパウロは、エペソを経てアンテオケへと戻って行きます。そしてしばらくしてからパウロは第三次宣教旅行を始めるのですが、彼がエペソに着く前にコリントの教会に手紙を送っています。そして、エペソに着いて滞在していたパウロに、Iコリント1章や16章の中に記されているクロエやステパナ、ポルトナト、アカイコというような人物によって、コリント教会の現状と問題を改めて知らされることになるのです。彼らからコリント教会がパウロに対して持っている質問を聞き、Iコリント7章からその質問にパウロがこたえていくのです。7章は結婚について、8章は偶像に捧げた肉、12章は霊的賜物について、15章は死人のよみがえりについての質問でした。そして最後16章の初めには、きょう我々が見るエルサレム教会の献金についての質問があったことを見ることができます。

さて、エルサレム教会は大変貧しい教会でした。その理由の一つはみことばが教えるように、大変激しい迫害を彼らが経験していたからです。これは使徒8章に出てきますが、そこを見る限りステパノが殉教した後、教会に対する激しい迫害が起こったこと、しかも「エルサレムの教会に対する」とみことばが記していますから、特に大変な迫害があったのでしょう。このような迫害を通して、間違いなく考えられることは、信仰を持つことによって家族から家を追われる者たちや財産を没収されるといったこともあったでしょう。そこで初代教会において、そういう兄弟姉妹たちはすべての持ち物を共有していたと使徒2章や4章に出てきます。そうやってみんなが助け合っていたのです。またもう一つの理由は、紀元46-48年にパレスチナを襲った大飢饉です。これも使徒11章の中に出てくるのですが、預言者たちがエルサレムからアンテオケにやって来て、その中のひとり、アガボという人物が「世界中に大きな飢饉が起こる」という預言をするのです。そして「それがクラウデオの治世に起こった。」と使徒11：28が教えてくれます。そこで必要のある兄弟姉妹たちをみんなで助け合ったと。

ですから、もう既に見てきたように、パウロはこのエルサレムにある教会のために、そこに住む多くの聖徒たちのために献金をしようとガラテヤの諸教会に命じ、コリントの教会にも同じことを行うようにと命じているのです。このパウロの教える献金は、確かにコリント教会がエルサレムの教会に献金を送ることについての教えなのですが、このみことばは私たちに、私たちの捧げる献金についても大切なことを教えてくれています。ですからきょう我々はこの大切なみことばから主にお捧げする捧げ物、献金についてどのようなことを主が教えておられるのか、何が主のみこころなのかを一緒に見ていくことができればと願います。

◎ 献金に関する教え 2節

2節に、パウロは献金について四つのことを教えています。

①「おのこの」

まず一つ目に「私がそちらに行ってから献金を集めるようなことがないように、あなたがたはおのこの」と、「おのこの」ということばが出てきます。つまり救われたすべての人々が献金を捧げるのだと言うのです。なぜそういうことが言えるかというと、神様の恵みというのは、あなた個人に与えられたものです。もちろん家族を神が祝福してくださるというのはありますけれども、救いは神があなたに個人的に下さったものです。ですからまずパウロは個人的に救いをいただいた者「おのこの」がその感謝を表すのだと言うのです。

②「いつも週の初めの日に」

二つ目は「いつも週の初めの日に」それを行えと言います。これを直訳すると、「毎週最初の日に」とな

ります。大して意味は変わらないのですが、週の初めの日に、毎週と。ですから日曜日にこのような献金をしなさいと教えたのです。このことから初代教会において人々は安息日の土曜日ではなくて日曜日に集まっていたことがわかります。彼らは週の初めに集まっていたのです。なぜかという二つの理由がありました。イエス様が死からよみがえって来たのは週の初めの日でした。そして過ぎ越しの祭りから50日目の五旬祭、ペンテコステ、聖霊が下った日も週の初めの日です。ですからそれを記念して人々はその時に集まっていたのです。その時に捧げ物をしなさいと。

### ③「収入に応じて」

三つ目に記されているのは、「収入に応じて」と書かれています。それぞれの収入、それぞれの仕事においてそれぞれがもうけたもの、働きや労働によって稼いだ物に応じてと。お気づきになったように、金額は記されていません。また、収入の何%捧げなさいとも書かれていません。それぞれが自分のいただいた物、稼いだ物、その収入に応じて自分自身がそれを決めて捧げるのです。

### ④「手もとにそれをたくわえておきなさい」

四つ目は手元にそれを備えておきなさいと書かれています。この手元にとというのはそれを何か取り置いたり、自分のわきに置いていくという意味です。「たくわえておきなさい」というのは非常におもしろいことばなのですが、宝物を保管するという意味があることばです。ですから例えばほとんどの場合月収なのですが、与えられた物の中から自分が考えた金額を取り置いておき、それを大切に保管して毎週、週の初めの礼拝の時に捧げなさいと。

これがこの箇所パウロが献金について教えている四つのことです。そして3-4節を見ると、あなたがたの承認を得た人々に手紙を持たせて、この献金とともにエルサレムに派遣しましょうという話が出ています。「あなたがたの承認を得た人々」というのは教会によってテストされて証明された信頼できる人たちの話です。献金を託すのですから信頼できる人たちでなければならぬのであって、そしてもし彼自身が同行した方がよいと教会が思うのであれば、パウロが同行すると記されています。

こうしてパウロはコリント教会から来た献金についての質問に答えています。今の四つのことを皆さんお聞きになって、多分多くの方が私はこれらのことを守っていますと言われると思います。週の初めの日に自分がいただいた物の中から、決めた金額を持ってやって来る。それはすばらしいことなのですが、一番重要なことはこれらのことをただ忠実に守り行うことではなくて、どのような動機でそれを行っているか、どのような心で行っているかが最も重要なことです。どれだけを捧げるかよりも、どんな心で捧げているのかが重要だと。なぜそう言い切れるかという、今私たちはこうして16章1節から4節と言っていますが、パウロの手紙は手紙として送られているので、章や節がついていたわけではありません。そうすると、前後は間違いなく関連しているのです。15章がどんなみことばで終わったかという、**「ですから、私の愛する兄弟たちよ。堅く立って、動かされることなく、いつも主のわざに励みなさい。あなたがたは自分たちの労苦が、主にあつてむだでないことを知っているのですから。さて、聖徒たちのための……」**と。15章でパウロはイエス・キリストの復活の話をします。この復活こそが我々クリスチャンが死に完全に勝利した保証であると。イエス様が死からよみがえって来た。我々も死からよみがえるのだと。私たちは死んでももう住まいが備えられていて、永遠が主によって定められたのだと。主とともに過ごすのです。この救いにあずかった愛する兄弟姉妹たちと永遠を過ごすのです。だから私たちは地上にいてこの愛する主のためになすすべてのことはむだではなく、ちゃんとその働きにふさわしい報いを主がお与えくださるのだと。その話をして、今度献金の話なのです。つまりこんなすばらしい祝福を下さった神に対する感謝と喜びをもとに私たちは捧げ物をなしていくことが必要だと、パウロはそのことを意図的に読者たちに教えようとしていることは文脈を見た時にくみ取ることができます。ということは、この献金というのは主の恵みに対する各信仰者の応答であると言えませんか？主がどんな恵みを下さったのかを知っている私たちはその恵みにふさわしくこたえていこう、それがこの捧げ物だと。時にはこのエルサレム教会に生じたような特別な必要のために捧げることもありますが、献金というのは教会のさまざまな必要を満たすものです。しかし、捧げ物や献金というのは主への感謝です。だからあなたの心が最も大切なのです。

## B. 献金についての三つの心得 IIコリント9：7

こうして私たちは献金についてさわりを見てきました。私たちがじっくり学んでおきたいことはこの献金についての心得です。実はパウロが記したコリント教会への手紙第二の中に、その心得について大切なことを教えているところがあります。そこをご一緒に見ていきたいと思えます。IIコリント9：7に**「ひとりひとり、いやいやながらでなく、強いられてでもなく、心で決めたとおりにしなさい。」**と記されています。ここに献金についての三つの心得が書かれています。一つ目は**「いやいやながらでなく」**、二つ目は**「強いられてでもなく」**、三つ目は**「心で決めたとおりにしなさい」**と。

### 1. 「喜びをもって」 7節

「いやいやながらでなく」というのは、私たちは喜びを持って献金を捧げるべきだということです。この「いやいやながら」というのは非常におもしろい名詞です。これは自分がしたことへの後悔がもたらす喜びのない不幸せな状態という意味があります。つまり自分のしたことを後悔しているものだから、自分の心の中に喜びが何もなく、まさにその後悔がもたらす不幸な状態を表すことばです。つまりこの人は自分が捧げた献金を惜しんでいるのです。献金しなかったら自分の生活はもっと楽だったとか、あんなに献金しなくてもよかった、あの半分でもよかった。そういう人の話です。

この人の一番大きな問題は主に対する愛です。神よりもこの世の物を愛しているところにあるのです。なぜそう言い切れるかというと、9：5に「どうか、この献金を、惜しみながらするのではなく、」ということばがあります。この「惜しみながらするのではなく」ということばは新約聖書の中に10回出てきます。その中の4回は「貪欲」、5回は「むさぼり」と訳されています。新改訳聖書第二版の欄外を見ると、脚注として「貪欲のようにでなく」と書かれています。「惜しみながら」している人、出したくない、献金をしたくないと思っている人は、実は貪欲な人であると。このことばはより多くの物をほかの人よりもより多く所有したいという願望を意味しています。だから出したくないのです。ですから、「いやいやながら」捧げる人というのは、できることなら捧げないで済むことを願っています。その中で仕方がないからと思って捧げているのであれば、間違いなくこの人は最高の物を神様にお捧げしているのではないですか？多分自分が必要だと考えるあらゆる物を差し引いた上で残った物から神様にお捧げしましょうと、残り物の中から神にお捧げする。果たしてそれが主に喜ばれることかどうかです。しかも、残り物から捧げることにしても渋々行っている、こういう心で捧げ物をなすのは神の前に正しくないと。

同じ5節「惜しみながらするのではなく」の後に、「好意に満ちた贈り物として用意しておいてください。」、「好意に満ちた」と書かれています。実はこの名詞は「祝福」という意味です。欄外にも直訳として「祝福」と書かれてあるかと思います。このことばも新約聖書の中に16回出てきますが、その中の7回は「祝福」、2回は「豊かに」、4回は「賛美」と訳されています。ですからパウロは、そんな正しくない後悔の心を持ってではなくて、捧げる、献金するということは実は祝福なのだ、そんなふうにいる人は喜んで、感謝を持って捧げ物をなす。その心が大切だと教えます。

## 2. 「積極的に」 7節

二つ目にもう一度7節を見ると、「強いられてでもなく」と書いてあります。つまり義務感で捧げてはならないということです。喜びゆえに、捧げることは祝福であることを知っているゆえに積極的に捧げようとする。またいろいろな必要があることが分かった時には誰かが満たしてくれるのではなくて、自分自身にできることは何かを考えてそれを積極的に行っていくと。

## 3. 「犠牲的に」 7節

三つ目に7節「心で決めたとおりにしなさい。」と出ています。私たちは犠牲的に捧げ物をなすのです。心で決めたとおりに、前もってそれを決めて行いなさいということです。規則だからとか、人から教えられたからその額を捧げるのではないということです。主に対する感謝にあふれていたなら、主に捧げることを喜んで行うだけではなく、喜んで犠牲的に捧げようとするはずです。

パウロはこうしてこの9：7から三つの心得を教えます。あなたの捧げ物、献金は喜びをもってなしていますか？あなたは仕方なしとか、しなければいけないという義務感でしていませんか？またあなたは喜んで犠牲的に捧げていますか？と。ぜひそれを覚えてあなたの捧げ物を捧げることで。

**実例：マケドニアの諸教会 IIコリント8：1-4**

### ①「喜びをもって」 8：1-2

私たちがもう少しこれを理解するために、パウロは実際にこのように生きていた者たち、実際にこのように捧げ物をしていた人々の話をIIコリントの中に記してくれています。8章の初めを見てください。それはマケドニアの諸教会の兄弟姉妹たちです。2節「苦しみゆえの激しい試練の中にあっても、彼らの満ちあふれる喜びは、その極度の貧しさにもかかわらず、あふれ出て、その惜しみなく施す富となったのです。」とあります。「極度の貧しさにもかかわらず」彼らは捧げたのです。大変貧しい人々でした。本来だったら、私はこんなに貧しいのだから私は受ける方であって、なぜ私が捧げなければいけないのだと思うかもしれない。でも彼らはその中でも喜んで捧げたのです。ちょうど貧しいやもめが自分の全財産を捧げたように。このマケドニア諸教会の兄弟姉妹たちはそうだったのです。

#### ・「苦しみゆえの」

なぜ彼らがそのような行為に至ったのかを書いてくれています。彼ら自身の与えられていた「喜び」です。「苦しみゆえの激しい試練の中にあっても、彼らの満ちあふれる喜びは」、そのような行動を生み出したのです。「苦しみゆえの激しい試練の中にあっても」とあります。「苦しみゆえの」と訳されていることばは、普通確かに苦しみは苦しみなのですが、大変な苦しみであるということの意味しています。このこ

とばは「圧迫」や「弾圧」という意味を持ったことばです。もっと違う言い方をすれば、オリーブなどを石臼で押しつぶしてそこから油を搾り出していく、それを表すようなことばです。ですからこの教会の兄弟姉妹たちの身には、私たちの想像を絶するような大変な迫害があったと。彼らは大変な苦しみを経験していたということがこのみことばからわかります。パウロはそのことを知っていたのです。

#### ・「激しい」

そして「激しい」ということばは、苦しみの度合いではなく出来事の回数を表すことばなのです。この箇所が言っていることは度重なる「激しい」苦しみの「**試練の中にあつて**」とパウロは言っているのです。マケドニアの諸教会の兄弟姉妹たちが何度も何度も大変な苦しみに遭遇していた、それがパウロがここで語りたことなのです。

#### ・「試練」 Iペテロ1：6-7、Iコリント10：13

しかし2節、少し不思議なのは、「**苦しみゆえの激しい**」困難の中とか、「**苦しみゆえの激しい**」迫害の中とは書かずに「**試練**」ということばをあえてパウロが使っています。なぜかという、パウロもそうだし、このマケドニアのクリスチャンたちも自分の身に起こるさまざまな困難、苦しみというのは実は神が与えてくださっている「**試練**」だと見たのです。非常に大切なことです。「**試練**」ということばは検査とかテストによってあるものの誠実さを知ることです。つまりあなたの本当の心の状態を知ることです。ですから私たちが経験する「**試練**」というのは、主に対する自分自身の愛や信仰の実態、つまり本当の自分を知るためのものなのです。神様はあなたに「**試練**」を与えることによって、あなたがどういふ存在かを知ろうとしておられるのではないのです。そんなことをしなくても神は私たちがどんな信仰者なのかちゃんとご存じです。知らないのは私たちなのです。あなたが知らないのです。ですから神様はいろいろな「**試練**」を通して、あなたがいかに神の前に愚かで罪深い存在であり、あなたがいかに不従順であり不信仰であるかを思い知らせてくださるのです。その時に絶対してはならないのは、私はだめな信仰者だと言って自己憐憫に陥ってしまう。そうしたら、あなたは神様の「**試練**」を正しく受け入れなかったのです。神は憐れみを持って我々の本当の姿を示してくださる。その時に我々信仰者はどうするかというと、神様、こんなどうしようもない私を愛してくださって感謝します、どうか私をあなたをより愛する者へと変えられますように、こんな私ですけれども、あなたが喜んでくださるように、そんな人へと私を成長させてくださるようにと神に助けを求めるのです。

どうすれば成長するか、我々はもう知っています。神のみことばを正しく学び、それを実践するしか成長する道はありません。あなたが毎日の生活で経験するいろいろな辛いこと、悲しいことがあります。でもみことばが私たちに教えてくれるのは、それはあなたのために必要だから神様が下さっているのだと、その機会を通して神様はあなたを成長させてくださるのです。ですからIペテロ1：6-7で「**あなたがたの信仰の試練は、火で精錬されつつなお朽ちて行く金よりも尊く、イエス・キリストの現れるときに称賛と光栄と栄誉になることがわかります。**」(第三版)。金を精錬するためには、金を溶かすことによって上に上がってくる不純物を除いていくのです。試練はあなたの人生からさまざまな罪を除いていく。あなたが成長するために必要なのです。そうしてあなたが成長するなら、あなたが主の前に立ってさばきを受ける時に、あなたは主から褒めていただけるという話です。ですからあなたがより主の前に正しい人として、主が喜んでくださる人へと成長していくために神は試練を下さるのです。神様が試練を下さるゆえに神はその「**試練とともに脱出の道も備えてくださ**」(Iコリント10：13)る、なぜそんなことをされるかという、神はあなたのことをご存じだからです。耐えられない試練に絶対遭わすことはないのです。だから試練も実はあなたのために特注されて与えられたものです。

こうして、パウロもマケドニアの諸教会のクリスチャンたちも大変な迫害があつても、大変な貧しさの中にあつても、その経験するすべての試練は愛する神が私の成長のために下さっているのだ、そのようにしっかりと、真理を覚えるだけではない、その真理に立って生きたのです。だから私たちもそうやって生きるのです。あなたの神様にあなたは信頼できますか？彼らは神が言われたことを信じたのです。だから彼らは変えられたし、祝されたし、神によって用いられたのです。

#### ・「彼らの満ちあふれる喜び」

2節のマケドニアのクリスチャンたちを見ると、「**苦しみゆえの激しい試練の中にあつても、彼らの満ちあふれる喜びは、その極度の貧しさにもかかわらず、あふれ出て、その惜しみなく施す富となった**」とあります。

「**彼らの満ちあふれる**」と書いてあります。これはその度合いを意味しています。私たちの考える程度を遥かに超えているということです。だから非常に大きいとか、超えて、さらに、はるかに大きいという意味です。つまり彼らが主からいただいた喜び、彼らが持っていた喜びというのはどんな状況にも勝るものだったということです。辛いことも悲しいことも痛いこともいっぱいあつても、そのすべてに勝る喜びを彼らは持っていたということです。確かに私たちは日々の生活でいろいろなことを経験します。悲しみであつたり、痛みであつたり、辛さであつたり、落胆であつたり、絶望を経験することもありま

す。でもこの人々は私たちが考えるよりも遥かに人間的に言えば悪い状態にあって、その中でも喜びを持って生きることができたのです。なぜならそれらすべてに勝る喜びを彼らは持っていたからです。驚きだと思いませんか？考えなければいけないのは、彼らはそんなふうに生きたのです。そしてあなたも私もこんなふうに生きることができるということです。

## ②「積極的に」 8：4

二つ目に彼らは積極的に生きたのです。8：4「聖徒たちをささえる交わりの恵みにあずかりたいと、熱心に私たちに願った」と書いてあります。注目していただきたいのは「交わり」ということばと「恵み」ということばです。

### ・「交わり」

この「交わり」ということばがあるのはマケドニヤのクリスチャンたちはいろいろな地域にあって、貧窮している兄弟姉妹たちのことを自分の家族なのだと見ていたということです。その人たちに会ったか会ってないかはどうでもいいのです。なぜならクリスチャンはそうでしょうか？我々はみんな神の家族に属するのです。どこの国に行っても、人種がどうであろうと、国籍が何であろうと私たちはみんな神の家族の一員なのです。彼らはちゃんとそのように考えたのです。

### ・「恵み」

「恵み」とあるのは、自分たちがそういうふうには貧窮している、困っているクリスチャンたちのために捧げる献金というのは、実は「恵み」だと考えたということです。彼らはそれを特権と思ったのです。決して義務とは思っていなかったのです。だから彼らは積極的に捧げ続けたのです。少し考えさせられませんか？私たちの献金が特権だとみことばは言うのです。私たちはそんなふうにして捧げ物をしているのでしょうか？でもよく考えると、私たちの捧げ物を通して神が何をなさるか——。神はそれを祝して主のみわざをなして行かれる。あなたは福音のメッセージがいろいろなところに広がっていく、その福音の働きの一端を担っているのです。そう考えると確かに私たちの捧げ物——献金というのは我々に与えられた大きな特権だと思いませんか？この主の働きに私たちは加わることができるのです。

## ③「犠牲的に」 8：3

三つ目に私たちはこのマケドニヤのクリスチャンたちから犠牲的に捧げ物をするのを教えられました。3節「私はあかしします。彼らは自ら進んで、力に応じ、いや力以上にささげ」と、パウロは現在形で「あかしします」と書いています。

### ・「自ら進んで」

彼らのことをよく知っていたのです。そして彼らのことを語る時にパウロは「自ら進んで」捧げていたと語り続けていたのです。見てきたように、この人たちは誰かに言われたから、強いられたからではなく、自分たちから進んで捧げ物をしていた。

### ・「力に応じ、いや力以上に」

この「力」というのは「財力」や「収入」という意味です。また「可能性」とか「容量」、「能力」という意味もあります。だから私たちが考えられるそれ以上のもの、つまり犠牲的に彼らは捧げ物をしていたということです。

## 結論：一体何がそのような喜びを彼らにもたらしたのか？

このマケドニヤのクリスチャンたちは、献金を喜びを持って積極的に、そして犠牲的に捧げ続けていた。これを考えたら、主イエス様の愛を彷彿とさせませんか？8：9がこう記しています。「あなたがたは、私たちの主イエス・キリストの恵みを知っています。すなわち、主は富んでおられたのに、あなたがたのために貧しくなられました。それは、あなたがたが、キリストの貧しさによって富む者となるためです。」、救いの話です。神であられるお方が「貧しくなられ」た。人として来てくださり、ほとんどの人からさげすまれ、十字架に架かって死んでくださった。それはあなたが豊かになるためだと。主イエス・キリストの犠牲によって備えられた救いにあずかった私たちは、最高の宝である永遠の祝福を得たのです。だから我々クリスチャンは最も豊かな者なのです。絶対金で買うことのできない永遠の祝福をいただいたのです。でもそれを私たちに与えるために、主ご自身は自らを犠牲にしてくださった。その話をしているのです。イエス様の愛というのは行いの伴った愛でした。ことばだけではなかった。同時にイエス様の愛というのは犠牲の伴ったものでした。このマケドニヤのクリスチャンというのは、まさに主の愛を模範にして、それにならって生きていたのです。主が自分のために犠牲を払ってくれた。だから私も愛する兄弟姉妹のために犠牲を払おうと。

でも一つ言うと、我々がなすことすべては犠牲ではありません。犠牲と呼べるのはただ一つ、イエス様の犠牲だけです。なぜなら私たちが持っている物はすべて神が託してくださったものです。それを神のためにお使いするのは犠牲とは言いません。でも確かにマケドニヤの兄弟姉妹たちを見た時に、主が歩まれたように彼らも歩んでいた。この人々の捧げ物は、神様の恵みに対する応答であったということ

ができます。

献金をする時に私たちに必要なことは、この捧げ物によって主がお喜びになられるかどうかです。それは献金だけではない。我々の礼拝もそうです。私たちのなすことすべてのことで、我々がいつも自分に問いかねなければいけないのは、果たして私のこの行為を主は喜んでくださっているのかどうか——。今私たちはこのすごいマケドニヤの兄弟姉妹たちの歩みを見たのです。喜びを持って、自ら進んで犠牲的に捧げたと。本当に彼らは主が歩まれたように歩んでいた。大変な困難や苦しみの中であって彼らはそれよりもはるかに勝る喜びをいただいていた。

◎ どうしたらそのように歩むことができるのか。

① 主の前を正しく歩んでいた 8 : 5

一つは主の前を正しく歩み続けることです。8 : 5を見てください。「私たちの期待以上に、神のみこころに従って、まず自分自身を主にささげ、また、私たちにもゆだねてくれました。」と、マケドニヤのクリスチャンたちは主のみこころに従って生きていたのです。自分のすべてを捧げて主のみこころに従っていた。つまり言い方を変えれば、彼らは主の前を正しく生きていたのです。

② 主の模範にならって歩んでいた（主の恵みを忘れることはなかった） 8 : 9

二つ目は9節に出てきます。主の模範にならって歩むことです。先ほどもお読みしましたけれども、「主イエス・キリストの恵みを知っています。……主は富んでおられたのに、……貧しくなられ」と。つまり、彼らが大変な喜びを持って歩んでいた秘訣は神の前を正しく歩んだことです。彼らは神が喜ばれることをしていたのです。私たちが何度も学んだように、「いつも喜んでいなさい。」（Iテサロニケ5 : 16）というのは実現可能な命令なのです。ではどうやっていつも喜ぶことができるか、いつも神を喜ばせているならば、神があなたを喜ばせてくださるのです。自分で自分を喜ばせましようと思っても、それは不可能です。でも神を喜ばせることを私たちがする、私たちが神の前を正しく歩んでいるならば、私たちに喜びを与えることによって、神が喜んでくださっていることを明らかにしてくださるのです。そうしてこのように生きた彼らは、すばらしいあかし人でした。彼らの歩みを通して、主の尊い愛を、また美しい主の御姿を人々の前に明らかにしていたのです。そんなふうにも私たちが歩むことができる。だから主の助けをいただきながら主の前を正しく歩み続けることです。

C. 主からの祝福 IIコリント9 : 7-11

さて、もし皆さんがそんなふう生きるならば、IIコリント9章で三つの祝福が主によって約束されています。あなたが主の前を正しく歩んでいるならば、そしてあなたが喜びを持って自分から積極的に犠牲的に捧げて、つまり神を喜ばせる捧げ物、献金をしているならば（繰り返しますが、献金だけの話ではありません）、神様がどんな祝福を下されるのか——。

1. 「主の愛」を与え続けてくださる 7節

まず9 : 7を見てください。一番最後に「神は喜んで与える人を愛してくださいます。」とあります。確かに神様はみんな愛して下さっている。でもここで言われているのは特別な愛です。このように神の前を正しく歩む人たちを神様は特別に愛して下さり、愛し続けてくれるということです。

2. 「主の満足」を与え続けてくださる：充足 8節

・「神とはどのようなお方か」

二つ目は8節「神は、あなたがたを、常にすべてのことに満ちたりて」と書かれています。この箇所は神様がどんなお方かを教えています。神というのはあなたがたに「あらゆる恵みをあふれるばかり与えることのできる方です。」と。8節は「できる方です」ということばが文頭に来て強調されています。神とはこんなことができるのだと。

主なる神は、これらの目的を果たすことができになる

ではどんなことができるのか、その説明がその後に出てくるのです。二つのことが書いてあります。

① 「常に、すべてのことにおいてあらゆる充足を得る／得続けるため」

「常にすべてのことに満ちたりて」と書いてあります。常にすべてのことにおいて本当の満足を与え続けることができる。「すべてのことに」、しかも「常に」、いつもです。あなた自身が本当に満ち足りた状態を保ち続けてくださると。そうでない状態というのは、もっとあれが欲しい、これが欲しいといつも何か不足を感じているのです。主よ、十分ですと、皆さん、そんな祈りをしたことがあります？神様、もうあなたの恵みは十分過ぎます。もう結構ですと。よく考えてみたら、神の恵みというのは「あふれるばかり」与えられているのでしょうか？もっと、もっと下さいと祈る人の歩みは恐らく感謝がないのです。もし主の前を正しく歩むのだったら、本当に主があなたの心を満たして下さって、何を食べるから満足して、何を食べないから満足しないのではない。どんなことであっても我々は満足しているのです。それは主が下さるものです。主の約束は、あなたが常にすべてのことにおいて、本当の満足を持ち続けることができる、それが神様の祝福として与えられると。

## ②「すべての良いわざにあふれる者とするため」

二つ目に言っているのは、「すべての良いわざにあふれる者」としてくれると言うのです。あなたが神の前に正しく歩んでいるとしたら、主はあなたが常に良いわざにあふれるもの、主の前に喜ばれることを行い続ける、そんな信仰者としてあなたを導いてくださると。だからマケドニアのクリスチャンたちは貧しい中であっても、主の栄光を現したのです。神様は彼らを「すべての良いわざにあふれる者」として使ってくださいましたのです。だから彼らが多くの人々の祝福になったのです。今の私たちにもです。すごい信仰者たちがいたねと。神様にはどんなことでもできると。そしてあえてここで言われたのは、神は本当の満足を与え続けてくれるし、あなたが「良いわざにあふれる者」になると。そういう人へと神はあなたを変えていってくれる。これが二つ目に与えられる祝福だと言うのです。

### 3. 「主にとって有用な者」として用い続けてくださる 9-11節

三つ目に出ているのは、主にとって有用な者としてあなたを使い続けてくれるということです。それが9節に出てくるのですが、まず詩篇112:9のみことばを引用した後、パウロはあなたが貧しい者に惜しみなく分け与えるならば、神様はあなたを物質的に豊かに祝してくださると言うのです。10節に「**蔦く人に種と食べるパンを備えてくださる方は**」とあります。この「蔦く」というのは金銭的な援助のことです。それをする人に「蔦く」ものを神様は与えてくれると言うのです。そして、11節「**あなたがたは、あらゆる点で豊かになって、**」と。必要のある人に与えている人たちは神が祝して下さって、ますます物質的にも豊かにされていくと。では豊かにされた人はどうするかというと、「**あらゆる点で豊かになって、惜しみなく与えるようになり**」、その人はもっと与えようとすると言うのです。この人たちは自分のために残しておこうとしていないのです。神様のために喜んで捧げましょうと。そして神が祝して下さって、祝されたらもっと捧げましょうと。その結果、11節「**それが私たちを通して、神への感謝を生み出すのです。**」と。つまりそのように貧しい必要のある人たちに必要を提供した時に、彼らはもちろんその人たちに対してもでしょうけれども、何よりも神に感謝を捧げると。なぜかという、このすべてのことを神がなしてくださっていることを彼らが知るからです。こうして神は神の前を正しく歩んでいる人たちを用いてくださる。主の前を正しく歩み続けている者たちにこんな祝福を与えてくれるのです。

#### 結論：「献金」とは？

まとめるとこういうことになります。献金とは一体何か――。

##### ・「主への愛を知る尺度である」

あなた自身の主に対する愛を知る尺度です。主のあがないのみわざを、救いのみわざを感謝し、主によって愛されていることを知っている者はそれを行動で示そうとします。神様、私はあなたを愛しています。こんなに私を愛して下さった、こんな私のために喜んで犠牲を払って下さった。私はあなたのことを愛しています。それをただことばだけではない。実際の行いをもってそれを示すのです。ですから彼らは喜んで積極的に犠牲的に主にお捧げしようとするのです。まさにその行動こそが神様に対して私はあなたを愛していますという、その現れでした。

##### ・「主への信頼を知る尺度である」 IIコリント9:6

神様は私たちの献金を期待しておられるのではないのです。主ご自身がご自身のみわざをなす時に我々の献金を必要とされるのか――。とんでもない、そんなものは一切なくても神様はご自分のみこころをなされます。献金というのは自分自身の主への信頼を知る尺度なのです。つまり、どれだけ私は主を信頼しているのかをこれを通して知ることができるのです。なぜなら、主はあなたの必要を満たすと約束してくださった。でも私たちが消極的に捧げるのはどうしてかということ、もし捧げてしまって生活できなかつたらどうしようとか、もし食べる物がなくなってしまうたらどうしようとか、そういった不安が私たちの行動を消極的にするのだと思いませんか？何が起きているのか？信仰が試されるのです。神は必要を満たすと言われたのです。その方を信頼するかどうかです。

ひとりの貧しいやもめは自分の生活費すべてを献金箱に投げ入れ、金持ちたちは有り余る中から捧げていたと。彼女がその後どうなったか――。考えたことがあります？どこか町の片隅で餓死していた？絶対にそんなことはありません。なぜなら神はその人の必要を満たすと。だから結局いつも神様が私たちに何をチャレンジしてくださっているか――。あなたは知っていると言えます。でもあなたは本当に私を信頼しているのか、私の言ったことばを信じて生きているのかと。感謝なことに、そのレッスンを学ぶためにさまざまな試練を私たちは経験するのです。クリスチャン生活は何をしているかということ、神に信頼することを私たちは日々学んでいるのです。しっかりそのレッスンを学ぶことです。神が言われたことは絶対そうなるのだという確信を持って生きることです。9:6を見てください。「**私はこう考えます。少しだけ蔦く者は、少しだけ刈り取り、豊かに蔦く者は、豊かに刈り取ります。**」、何の話をしているか？もし収穫を考えている農夫たちが種を蔦く時に、少ししか蔦かなければ少ししか収穫ができま

せん。多く蒔けば多くの収穫を得ることが期待できます。みことばは信仰も同じだと言うのです。「豊かに蒔く者は、豊かに刈り取る」、少ししか蒔かない者は少ししか刈り取らないと。だからあなたの信仰が、あなたの主への信頼が小さければあなたの刈り取る物は小さいと。でもあなたの信頼がしっかりしているならばあなたの刈り取る物も大きいということです。

6節に「豊かに」ということばが出ています。実は新改訳聖書の欄外にちゃんと説明してくれています。そこに直訳として「祝福をもって」と書いてあります。実はこの6節の「豊かに」ということばと5節の「好意に満ちた贈り物」は同じことばが使われています。どちらも「祝福」という意味です。ですから捧げる者は捧げることが祝福だと思ふと。6節でパウロが言うのは、神を信頼して豊かに捧げる者は豊かな祝福をいただくのだという意味です。この人は神を信頼しているのです。当然神はその人をお喜びになる。そしてその人に豊かな祝福を与えられると。ですから捧げ物というのは我々の主への信頼のあかしだと言えます。主が必ず必要を満たしてくださるということを教えてくださった。主を愛している信仰者はそのみことばに信頼を置いています。必ず主がなしてくださるという確信を持って喜んで、主の犠牲を考えながら、それにふさわしい捧げ物を捧げようとする。どうでしょう？あなたは献金をそういう思いを持って捧げているのでしょうか？

#### ・「主への忠誠を知る尺度である」 マタイ 25 : 21

捧げ物と言った時に、神様ご自身が私たちに託してくださった。それをどう使うかは私たちの責任です。皆さんもマタイ 25 章で、イエス様がオリブ山でお話しになった有名な話を覚えておられると思います。その中で、5タラント、2タラント、1タラント預かったじゃないですか？清算の時に、主が5タラント、2タラント預けた者たちを呼んだ時に何を言われたかということ、「よくやった。良い忠実なしもべだ」と。その後「あなたは、わずかな物に忠実だったから、私はあなたにたくさんの物を任せよう。主人の喜びをともに喜んでくれ。」とあります。私たちが持っている財産やお金は実は神が私たちに託してくれたものです。我々の健康も、時間も私たちが持っているすべての物の中で、これは私のものと言えるものがあります？いのちも神が下さったのでしょうか？人生の長さも神がちゃんと決めておられるのです。全部神からのギフトなのです。確かに我々が仕事をした。でもその仕事をする力を下さったのは神です。神はすべてのものを私たちに託してくださった。それらを用いて神の栄光を現すためにです。神に喜んでいただくためにです。だから私たちが考えなければいけないのは、神が私たちに託してくださったものを神の前に正しく用いているかどうかなのです。ここで言われた「わずかな物に忠実だった」というのは、こういった託された物質に関しても、お金に関しても神の前に神のために正しく使っているならば、主の前に立った時にあなたは忠実であったとあなたを褒めてくださるという話です。だから私たちが考えなければいけないのは主が託してくださったすべてのものを本当に主のために用いているのかどうかです。

私たちはこうして捧げ物を通して主のみわざがなされていることを信じています。そしてそういうふうになされてきました。感謝なことに私たちの群れを通して多くの人々が福音を聞くことになった。主のすばらしい恵みに触れることになった。そういうふうに神様は私たちを用いてくださった。あなたはその一端を担っていたのです。そして今も担っているのです。主の恵みを覚えながら、感謝をもって、あなたのすべてを主に捧げすることです。主は私のために用いなさいと、あなたに託してくださったのです。どうかきょう教えてくださった献金ということについて、みことばにしっかり基づいて感謝と喜びをもって自ら進んで犠牲的に捧げて、主に喜んでいただきたい、その思いをもってすべてのことをなして行きたいと思ひます。